令和元年度 短歌講座

短歌集

塩尻市中央公民館

令和元年度短歌講座を振り返って

　毎年6月から翌年2月にかけて9回行っている中央公民館短歌講座ですが、初めての試みとして参加者の方の短歌をまとめた令和元年度の短歌集を作成しました。この講座はかつて私の恩師である故・保科郁夫先生が講師をされ、続いて前公民館長・北澤智彦先生が講師をされ、令和元年度より私が受け持つこととなりました。若輩者ではありますが、講座の諸先輩方が温かく迎え入れてくださり、忌憚なく意見交換をしながら講座を行ってきました。

　私の申し上げることが絶対とは思いません。私と、受講の皆様お一人お一人とのやり取りまたは駆け引きによって生み出された文字の組み合わせ、そのものに価値があると思います。そして全体を通して読んでみると、思わず笑みがこぼれる歌、悲しみの歌、時事的な歌、崇高な歌いぶりなどバラエティー豊かで、読む人を飽きさせません。令和元年度というタイミングで偶然出会った私たちが作り出した、かけがえのない作品集だと思います。

　是非一度手に取って、どこからでもパッと開いたところから読んでみてください。興味が持てたらその前後に目を通してみてください。さらに興味が沸いたら、最初から一通り読んでみてください。短歌づくりはいつでもどこでもできるのと同様に、短歌の読み方も色々あって楽しめば良いのです。

そしてさらに興味が沸いてきたら、ぜひ私たちと一緒に短歌を作りましょう！

令和２年５月　短歌館指導員　藤森　円

散歩道

いつもと違ふ

角曲がる

なんかドキドキ

一寸わくわく

少しでも
若く見られたき
同窓会
しわとりパックの
力を借りて

久々の
梅雨の晴れ間の
ベランダの
洗濯物が
まぶしく光る

初めての
高齢者免許
更新の
実技の先生
その声やさしい

老犬の
夜鳴きに起こされ
ふと見ると
下弦の月が
夜空に浮かぶ

老犬の
夜鳴きに起こされ
気がつけば
郵便受けに
新聞ことり

いつも通る
キウイの棚の
ある家に
今日もまだある
まあるい香り

鳩は鳩

カラスはカラスの

かたまりて

落ち穂ついばむ

秋の夕暮れ

「逆走だ」

やれ「あおりだ」と

テレビから

吾をあおりたる

声の止まらず

夫の留守の
家にひびける
電子音に
「ハイ」と返事を
したるこの朝

をだまきは
外路灯のごと
下向きに
わたしを点す
あかきいむらさき

庭縁に
育ちしトマトの
黄の花は
ほたるのごとく
葉裏を照らす

木曽谷の
アカシヤ蜂蜜
詰めしびん
ひとりの朝餉に
黄金の香り

三歳児は
ピカソ画伯だ
クレヨンの
金魚もひよこも
紙面を飛び出す

濡れ縁に
青大将は
秋日浴ぶ
光る鱗に
脚の竦みぬ

ボランティアの
泥まみれの腕
たくましく
被災者たちと
廃材を引く

諏訪の湖の
岸辺の浮きごみ
寄せる波
鴨の群れ来る
小春日の午後

吉野さんの
ストックホルムの
授賞式
夫人の晴れ着
青く輝く

長靴に
篭もち田川の
中洲にて
流れに逆らひ
クレソンを摘む

二階から
カメラ向けゐる
その先の
空の大きな
彩雲の帯

時ならぬ
雀のさわぎに
ふりむけば
猫が飛び出し
すずめ舞い散る

宿場町に
笑顔あふれる
漆器祭
きもの姿の
母子づれ行く

お医者から
帰る途中の
空色の
木槿の花に
足を止めをり

予告なく
いとこ三人
来てくれし
思い出話に
暑さも忘れ

早退の
児のお迎えの
車きて
みんみんひびく
校庭の木木

ついてるね

帰省のわが娘

同じ日に

松茸届いて

松茸ごはん

被災地の
心痛める
大雨が
容赦なく降る
空を見上げる

庭隅の
青きトマトを
次々と
ピクルスにして
秋も終わりぬ

雪花の
世界となりし
木曽谷は
射し込む朝日に
輝かんとす

「甘酒と
コーヒーは良い」の
テレビ見て
「両方好きだ」と
夫は自慢す

ジュッピョとも
キュチイチチョとも
書きたれど
美しき野鳥の
声には遠し

海のない
信濃に住めど
この吾も
海を汚せる
一人でもある

私なら
二時間歌って
へばるのに
あの郭公は
まだ歌う気なの？

炎天下に
トマトの収穫
なす人の
たくましき腕
今年また見る

果樹園に
蕎麦の畑に
水田に
近づく台風
ただ祈るのみ

あまたなる
蜘蛛の子いくつ
生き残り
この軒下に
糸を張るらむ

高らかに
「早く来い来い
お正月」と
歌ひし頃に
また戻りたし

街外れの
日暮れの小さき
スーパーで
レディーファースト
してもらいたり

奈良井ダムを
はるか見下ろす
坊主岳の
舞鶴草は
我を励ます

いにしへの
人の作りし
拾ヶ堰
山に向かひて
水ゆくごとし

常念岳に
積み上がりたる
花崗岩
わが青春の
柩に似たり

白馬の
大雪渓の
止めし岩の
動かぬことを
祈りつつ登る

地蔵岳の
天を突きさす
オベリクス
行く手を阻む
花崗岩の砂

京ヶ倉の
朝日浴びたる
生坂は
雲海脱ぎて
今起きむとす

陣馬形山を
登り来たれば
マイカーの
登山者たちが
テント張りおり

松茸を
盗んでないかと
声掛ける
監視員いる
四阿屋山なり

朝五時の
鶯の声
ひとり聞く
この幸せは
何時迄続く

病室の
病みたる友は
AMの
『別れの曲』を
目を細め聴く

麗しき
十代のころ
思ひ出す
『マチネの終わりに』
この年で読む

急激な
暑さの続く
この頃の
朝の体操
しやつきりいかず

大勢で
植えた花花
丘を成し
アルプス映ゆる
信州花博

背を伸ばし
呼吸整え
心静め
座禅をすれど
警策受ける

資料館の
唐箕のハンドル
回すたび
目を輝かす
遠足の児童ら

わが夫と
息子等と共に
木曽駒の
山頂に立ち
古希を祝はん

快晴の
買出しドライブ
楽しめば
雪のアルプス
顔見せている

暖冬は
助かるねという
会話した
翌朝初雪
一〇センチあり

年賀状の
当選番号
探したる
百五十枚が
見事にはずれ

道端の
イヌノフグリは
ひつそりと
我を引き寄せ
春をつげをり

ゆい返し

若き者休日

返上で

地域総出の

田植なつかし

大き荷を
頭上にかかえ
急ぐ蟻
力もらいて
草引く我も

並木道

緑陰すがし

宝物

反面伐栽

隠れた被害か

広大な
キャンパスの中
飛行機の
白き線引く
二ツに分けて

断捨離を
新聞に見て
始めし我
前に進まん
思いつまりて

冬枯の
芝の上にて
スズメ達
おしゃべりしては
餌をはみ居る

紅葉の
赤黄緑と
空の青
自然の色の
何と楽しや

これほどに
自然災害
重なるも
地球の異常
計り知れずに

中空の
鷺、鳩、烏、
地の真鶸
鳴き声飛び交ふ
夏のあけぼの

こんな夜は
ほととぎす来て
鳴くはずと
雑木林に
ひとり佇む

出征の
兄の荷物の
「千人針」
徹夜で仕上げし
母の眼赤し

台風の
余波に逆らう
青鷺が
右へ左へ
一途羽ばたく

再会を
約し友との
電話切り
生きてゐればと
ふと呟きぬ

気紛れな
夫の植ゑたる
南瓜苗

四月半ばの
霜にあひたり

膝少し
抱へて浸かる
甕の風呂
満月だけが
吾を見てゐる

鼻の奥の
記憶は警鐘
鳴らしても
つい手がのびる
十薬の花

アスファルトの
小さき凹みの
水溜りの
小雀二羽が
行水始む

じゃんけんの
弱い夫乗せ
仮免許
練習中の
子は走り出す

ベッドから
炬燵にその身を
移し替へ
息子をかたる
亀がをります

保護者会
仲間と偶然
再会す
互ひに母待つ
病院の中

成人の
お祝ひせむと
思ひても
息子は友達に
誘はれてゆく

雪の日の
露天の風呂に
吾ひとり
野猿のやうに
顔だけ出して

春蝉は
梅雨の晴れ間の
新緑の
命をうたう
色深みゆく

干鰊に
醤油をかけて
一杯の
酒にうましと
言ひし友逝く

土手上の
白き野ばらの
一群の
ほのかな香り
母に似ている

夜半の雨の
水滴残れる
蜘蛛の巣が
ひらりひらりと
光るたまゆら

新元号
「令和」の最初の
一文字が
姪の名前と
一致してをり

梅雨の日の
ときに激しき
雨音に
改めておもう
広島豪雨を

田の中に
草取る人の
仕事こそ
実りの秋の
希望あふれさす

昨日までの
暑い暑いの
口ぐせを
忘れてしまう
今朝の涼しさ

取り入れの
仕事も終わり
ゆっくりと
我が家に帰る
令和の秋も

はちみつと
菓子とお酒の
ラベルあり
令和フィーバー
まだ覚めやらず

日日深く
なりゆく柿の
緑の葉
二本のポットへ
麦茶を満たす

若者の
恋の短歌など
聞きてをり
木の香漂ふ
ここ「えんてらす」

松茸の
万葉集に
載りたるを
思ひ出す秋
令和に食べたし

母親の
抱っこバンドに
微睡む児
声をかければ
はつか頬笑む

片付けに
追はれる人らに
今日も降る
被災地の雨
優しくあれな

中学生に
なりたる孫は
唐突に
「壬申の乱」を
吾に訊きくる

被災地に
ハンドベルの音
届けたる
学生たちの
創りだす夜

年明けて
干支の鼠に
追はるるや
今日も猪
出没情報

退任の
時刻となりて
妻とともに
めぐりし校地
目に浮かびたり

火の海の
ごとく見えたる
麦秋の
中に下り立つ
パリ空港なり

収穫を
わが子に託し
生涯の
最後の事業の
種をまきたり

暑き日の
西に傾く
迎え盆
わが家の窓の
ゆきあいの風

物となり
肩にねずみを
遊ばす如
座禅の僧の
無心の姿

今日あるは
無用の用と
言うごとき
木曽ひのきの箸
妻が並べる

長野県の
想定越えた
大雨に
山河破れて
廃墟は残る

温暖化
防止を叫ぶ
世の中に
イルミネーション
なぜ増えていく

堤防を
破りあふれる
泥水は
血潮のごとく
街うめつくす

夫の留守に
水ぽちぽちと
かめに溜め
節約するとふ
不便楽しむ

妹と
二人して出た
旅なれば
父母弟
みな登場す

この人と
会うと話が
長くなると
察したわが犬
木陰陣取る

艶やかな
糠漬茄子の
紫が
一人の朝の
食卓に載る

土手の道
登りてゆけば
今年また
ほたるぶくろの
薄きむらさき

名も知らぬ
あまたの草が
この畑を
我も我もと
拡がりていく

雨蛙は
切りたる葡萄の
房に居て
じつと動かず
吾と睨み合ふ

久びさに
子供等とゆく
上高地
大丈夫の声
森に響きぬ

黒猫が
白くなりたる
穂高岳を
じっと見ている
背筋伸ばして

正月の
休み終はりて
子供らは
やうやく行けりと
友から電話

野に出でよ
畑耕せと
急きたてる
改元前の
いやおひの月

駒ヶ岳の
雷鳥たちよ
餌探し
親子達者で
無事に育てよ

梅雨明けの
畑の草引く
手の中に
根の長き草の
土塊にぎる

秋涼を
誘ひ込みたる
秋桜
風とたはぶれ
散らす花びら

不便さを
愚痴る知人に
訊きたれば
早合点の
免許返納

葉に紛れ
見分け付かざりし
柿の実の
色付きて消ゆる
不作の懸念

温暖化

防止訴ふ

グレタさん

火力発電の

日本憂ふらむ

冠泥と
落ちたリンゴを
片付けて
剪定したる
農夫の鋏

病院の
枝垂桜の
枝々を
垂るる氷柱の
ほの明るみぬ

わが帽子の
ひさしうしろに
向けたれば
田川のほとりの
草の穂さわぐ

誰にでも
「ごくらうさま」と
ねぎらふ夫
吾にそのことば
何時ありしかと

帰省する
子等思ひつつ
ギンナンを
むきて楽しむ
冷茶椀蒸し

みんみん蝉

鬼蜻蜓とびし

青き空

木陰にねむれ

夏の勇者等

わが夫は
服の流行
追はざれど
誰より早く
流行りかぜひく

わが夫と
山菜おこは
味はひたり
大阪の孫は
今日七五三

江戸に出で
創業したる
「有明家」は
信州人の
誇り忘れず

とうめいな
コップに入れたる
三葉の根
小さきはつぱの
顔を出したり

「あの人へ
どんなお花を
贈ります？」
プリムラの花が
語りかけてくる

柔らかき
芽の欲しと植ゑし
楸の木は
気付きたる今日
葉となりてをり

丘いちめん
色とりどりの
「花フェスタ」の
シートの下の
捨てられし花

「もうひとつ
とまっていって」と
すがる孫に
さよならを言ふ
あずさばし駅

山道を
ウォーキングする
最中に
広報流る
「熊出没中」

孫や子の
労はり返つて
照れ臭し
普通がよろし
敬老の日も

わが友の
電話未だに
繋がらず
テレビは千曲川の
決壊映す

携帯電話に
用は足りるも
世はスマホ
迷ひ迷ひて
未だ決まらず

窄みたる
石楠花の葉と
対話して
気温言ひ当てる
九十歳の義兄

九州の
形に氷の
張れる朝
先ずは訪ひたき
長崎に立つ

鳴き声が
耳から離れぬ
苦しみを
豚コレラ処分
職員の言ふ

マニラより
地震気づかふ
息子の電話
いはれて急ぎ
テレビつけたり

桑畑が
葡萄畑に
変はりたる
故郷の道を
姉と歩めり

「オクラあるよ！」
電話をくれし
八十二歳
楽しい会話の
はりのある声

ラインにて
送りし夫の
奥穂高岳
グループトークの
子等の歓声

『ごんぎつね』
聴くたびせつなく
迫りくる
ホールの中の
ビデオシアター

百五十

センチの背丈の

緒方さん

難民達に

寄り添ひ続けた

百の声
夫もその中の
声となり
『歓喜の歌』は
響き渡りぬ

地球には
人や魚や
獣住む
譲り合ひつつ
生きていきたし

あとがき

　この短歌歌集は令和元年６月～令和２年２月まで開催された中央公民館の短歌講座に投稿された短歌になります。参加者の方々が思い思いに詠った短歌であり、それを講座の中で講師の藤森先生にアドバイスしていただいたり、感想を参加者同士で話し合ったりしていました。
　この短歌講座は長年開催している講座になりますが、このように短歌集を作ることは初めての取組です。講座内だけではなく、講座に参加していない方にも見ていただきたいという思いから作成をしました。一首一首を見やすいように、大きく掲載しています。みなさんの思いや日常が溢れている素敵な短歌なので、是非ご覧いただき、少しでも短歌に興味を持っていただけたら幸いです。そして短歌は、気軽に誰でも楽しめる「言葉遊び」ですので、「私もやってみたい！」「短歌って少し興味持ってきたけど、どうやればいいの？」と思われた方は、中央公民館までご連絡ください。新型コロナウイルス感染症の影響により、令和２年度の講座は当初６月から開講でしたが、現在は７月開催を目指しています。
　短歌を通したみなさんの「つながりづくり」のお手伝いができたら幸いです。

令和２年５月　中央公民館

令和元年度短歌講座　短歌集

編集・発行　塩尻市中央公民館
発　行　日　令和２年５月
お 問 合 せ　中央公民館
電話：0263-52-0899